

- ◎6:30 出発。京都の奥、佐々里峠から、「小野村割岳」に登ろうとして車を走らせている。オレンヂのあたり、京都方面、神戸方面が、それぞれ東西にあるので、朝日と夕日が眩しい、「東西があるのは お前のところだけじゃねえぞ」と怒られるかもしれないが、今日は朝日が眩しい。
- ◎我がアトリエに絵を描きに来られている清子さんが、故郷の福知山市展に何度か出品されているが、入選だけで入賞がないと悩んでおられる。「高槻市展では 常に入賞してるのに」とうんざりされている。福知山市展のレベルがよほど高いのか、傾向が違うのか、「ちょっと見てこよう」と計画した。「せっかく行くなら 車中泊を楽しみ ついでに山も登ろうか」なんて計画しながら小野村割岳を思いついた。
- ◎佐々里峠には、京都の大原から久多を通るルートを考えていたが、ナビは京北町の方に誘導する。ええいナビを信用しようとそちらに向かった。「あれれ ここは前に来たぞ 高台寺だ ここは 廃村八丁がある村だ」なんと3時間半もかかって10時に佐々里峠にやってきた。
- ◎佐々里峠に近づくにつれ、空が雲だらけになってくる、まもなくだというころには地面が濡れだし、峠に着いた時には小雨が降っている。一日順延すればよかったかなとも思ったが、ま、仕方がないか。
- ◎雨具の上下を着こみ、ザックカバー、カメラの入ったポシェットにはビニール袋をかぶせ、まずは梯子を上る。
- ◎勝手に、ICレコーダーがオンになったのか無音。鈴の音がチリンチリン、靴の音がグューグワーとたがいちがいに、ときどき獣に似たオレの呼吸音と小さい雄たけび、おう、とか、がああとか、そしては～は～。
- ◎この山は丁寧にナンバーが打った地図がきれいな杭に吊るされている、これは迷わないね、だけど、目印の赤いテープが無いとは珍しいことだ。
- ◎歩きはじめたころはしとしとだった雨が、だんだんきつくなってきた。空模様はまったくの雨の空でどす黒い。歩きやすい道でアップダウンも少ない。ネットで調べると、皆さん往復で7時間ぐらい使っておられる。今日は途中までかな、雨の山は嫌だねえ、今晚は車を置いた佐々里峠で寝ようかと思っていた、ゆっくり奥まで行って帰れば夕方になる、だが雨では奥まで行けそうもないね。
- ◎我が、GPS君、どうも動きが芳しくない、動きが鈍い、おかしい、ここがどこなのか、さっぱり動いてくれない。「ここがどこで 登山道がここで 順調に歩いてるよ ちょっと道からそれたよ」これがないとねえ。
- ◎この山、小野村割岳は、立派な樹が在るということで有名だ。「巨木だ 巨木」さすがにいうだけのことはあって、いくつかのでっかい樹があった、が、オレにいわせれば、「でかいだけじゃねえ」である。どうもその魅力ぶりがピンとこない、樹々たちの持っている個性的な魅力、精霊が宿り、叫び、震わせている振動が伝わってこない。これはなんなのだろうね、雨のせい？初めて見たせい？もっと奥まで行かないとダメかねえ。
- ◎ネットで見るに、どなたか、コースにない所を登っておられる、これもまた魅力的だねえ。
- ◎雨がやみかけている、冷えてきた。今季初めて毛糸の帽子を出し、手袋をはめた。せっかく来たのだと、せっせ写真を撮った。「許可なく入るな」と所々に看板がある。「この尾根から 左側に入るな」ということらしいが、尾根の真ん中に書いてあると、「山に入るな」に見える。いやだねえ、京大芦生演習林の連中、「なにさまだ くそやろう 歩いているだけじゃねえか」と思うが、彼らもせっかくの機器を、時間をかけた観察材料を、潰され、倒され、怒り憤懣やるかたなしなのかな。
- ◎雨そして時間が無い、半分ぐらい来たところで引き返すことにして、そそくさと弁当を喰った。このあたりは熊が多いそうで、飯をほおぼりながらも鈴をチリンチリン鳴らし続けた。熊には会いたくないものだ。この弁当は、昨日のおかずの余りもののキンピラと玄米ご飯、梅干しも入れてある、旨い。
- ◎高低差も少ない、踏み跡がしっかりついている、なん箇所かに順番にナンバーが打ってある、歩きやすい道だ、あっちこっちをうろうろしながら、でかい木を愛で、ゆっくり道草を喰って歩いた。夏は樹々のはっぱが、地面の草が生い茂っていただろうが、秋の山の中、晩秋の今、冷たい風が吹き紅葉が始まり、でかくない樹もそれぞれに個性を見せて天に向かっている。まもなくすれば葉が全て落ち、細いエダエダが針のように天を指す、白いものが地面を覆い常緑樹の緑が生える、そんな時期ももうすぐだ。

- ◎車のところ、佐々里峠まで帰ってきた。雨はやみかけているが空はまだまだどす黒い。湯を沸かしコーヒーを入れ、羊羹、カリントを喰った。峠を登る手前に鉄扉があった、冬季には閉まるのかもしれない。
- ◎時間が早いのもう少し先に進むことにして車を走らせた。このあたり、かつて、来たことがある記憶がおぼろげにうかんできた。廃村八丁やら、五波峠の名前が出てくる。
- ◎山の道を走ると、廃屋が、人が暮らしていた気配がする所が日本中たくさんある。昔はどんな山の中にも人がいて、働いていた、暮らしていた、そんな家が締め切りになり、屋根が崩れ、人影が無くなっている風景をよく目にする。若者たちが都会に集まり、近代生活を満喫しているが、リターン現象が頻繁に起こるといいねえ。
- ◎美山に向かう手前、芦生演習林の方に向かった。車を止め京大の手前、川上に向かって歩いた。由良川の源流らしい。芦生にも人が暮らし、それなりの産業があったのだろうけれど、今は廃村だろう。
- ◎雨がしょぼ降るなか、「どこで寝るかな 道の駅もいいけれど もうちょい ワイルドな山の中」と探したが、トイレはあるが車が通る、夜中に、「もしもし 大丈夫ですか」なんて起こされるのも嫌でまたまた車を走らせた。「よし 予定通り 和知市に向かおう」すでに真っ暗でまわりが見えないが、横がダム湖のようだ。
- ◎和知市の道の駅にやってきた。建物はまだ明かりが点き、あと片付けの最中だ。車が3.4台、どなたも机やいすを出して飯を喰っている様子はない。はしに車を止め、コンロ・ナベ・イスなどをだした。高野豆腐、ソーセージ、サンマの缶詰、これら家にあったものを喰い、焼酎の湯割りを飲んだ、旨いねえ。「あれれ 野菜が無い 昨日の夜に きざんだ野菜が無い キャベツとキノコ・・・」しかたなく素ラーメンでがまん。
- ◎8時ごろに眠りにつき、7時ころまで寝ていた。昨夜の車が3.4台まだある、寝ているようだ。コーヒーを沸かし、ごはんパンにとたくさん喰った。道の駅の野菜は8時半に販売するというので、北側の山の麓にある道を散策した。「盆地は 霧が出ますよ」と言われといたが、今日は快晴、お陽さまがキラキラ、昨日もお陽さまがキラキラだったらと、悔しがるオレである。
- ◎オレも老人になった、「まだまだ若いよ 元氣だよ」といったところで、「鏡を見よ おのが写真を見よ」なるほど立派なおジンである。これからのオレは、山と絵だけに関わるぞ、ほかのことはどうでもいい、ただし、「美しく 生きる」これだよ、ぼやくな、人を見るな、前を見ようだ。
- ◎和知市を流れる由良川は、水量も川幅も我が近所の安威川の数倍はある、澄み切った水が音を立てて流れていく。昨日京大演習林の横、由良川源流をしばらく歩いたがそのあたりでさえ、水量は安威川と変わらない。小高い山の多いこのあたりは雨が山に吸い込まれ、どんどんきれいな水が湧き出て川を満たしていく感じかな。
- ◎道の駅で農産物を買った。名物の黒枝豆、干し柿用柿、甘い柿、その他の青菜などで2500円なり。陽が照って暖かい、車に乗せ覆いをかぶせ、家に帰るまでの半日、新鮮さが保てますように。
- ◎福知山市厚生会館とナビを入れると、30分ぐらいで着くという。「え そんなに近いのか」と驚いて出発した。福知山市内に入ると、ここは都会、信号に車に人に、まず城が目につき、会場に着いた。前の駐車スペースが空いているので止めた。
- ◎今回の旅の目的は、この市展をみることだ。肝心の視点のことを忘れ、山に散歩にと楽しんでいるが、しっかり絵を見よう。コロナ禍の今、車に置いてあるマスクをし、会場受付で検温と氏名・電話番号を書かされた。会場は大ホール、間仕切りなしで天井もものすごく高い。茨木や高槻の会場に比べ美術品が生える、生き生きしている。いいないいな、作品も会場もと見まわしたが、目的の清子さんの絵が無い、なんでないと二三度見まわした。まさかと思って出口に向かうと薄暗い場所にあるではないか、数点の絵と一緒に番外編で置かれている。「これは えらい区別だなあ 市外の人用の場所かな」清子さんは福知山出身の人、福知山高校を出ておられる。出品する時にお母さんの福知山の住所を書くべきだったねえ。
- ◎城を見ようのぐるり歩いた。見上げてみると、「お城 きれいよ 夜は ライトアップされて」女の方が話しかけてきた。「私も 福知山高校出たんよ 65歳 嫁いできて アシダ というんだけど・・・」
- ◎ゆっくり車を走らせ、4時過ぎには家に着いた。車中泊の旅、いいもんだ、たまにはこんな旅しなくっちゃ。

松浦昭次著<宮大工千年の知恵 語り継ぎたい、日本の心と技と美しさ>

◎これを読みながら、2018年の北海道の旅で知り合った大工さんを思い出す。彼は本格木造建築の大工だそうで、「〇〇大工」だと聞いたが、その言葉を忘れてしまった。関西に昔からよくある百姓家さんの家屋、壁は漆喰だとか板壁、屋根は黒瓦、そんなどっしりした木造建築の大工だそうだ。「もう大工はやめた」「え なんて」50歳代ぐらいと思うが、もうやめたという。この時代、本格木造建築は流行らない、注文が無いそうだ。施主はプレハブ構造の家を選ぶそうだ。「木造なんて 古くさい デザインが悪い・・・」彼が飯を喰いながら、木組みのこと、カンナのことをいろいろ聞かせてくれた。

◎著者の名前を検索していると面白いブログにつきあたった。ブログの主は、熊本で村田工務店を営んでいる方、この本に対する感想文です。開口一番に、「実に奥深い一冊でした」と書いておられる。初代と二代目が宮大工だったらしく、昔建てた立派なお宮さんの写真が載っている。施工中の木組みの写真で、「弊社も伝統工法の木組みをおこなっています」昔の棟梁が、棟上げが終わった後に、「このあと地震が来ればいいんだが」「地震で建物の木組みがより完璧に締まるんだが・・・」それを聞いた時には鳥肌が立ちました、もしかしたら真冬だったかなあと、洒落も・・・著者の、「明るい現場 人生をかけられる仕事・・・」と書かれているのに、村田社長、「奥深いですよ」と言いながら、「なんでこんな面倒な仕事を俺がやらないといけない」「儲からんし手間もかかりすぎる・・・」ともぼやいておられる。

◎村田工務店コピー:昔ながらの手刻み工法にこだわり、厳選した、杉・ヒノキ 00%使用の、本物木造住宅です。

◎宮大工の松浦さん:私は、結局、死ぬまで一介の大工でいることになりそうです。会社でも作って人を使って仕事をしたいという考えはさらさらありません。<略>中世の大工が一体どんなやり方で建物を造っていたのかを考えていたら、<略>百年も千年も前の大工と、話をしながら仕事をして、また何百年か後の大工のことを考えながら仕事をする。文化財の修理という仕事には他の仕事では味わえない喜びがあるのです。

◎木材に合わせ、道具に合わせて仕事をしていかなかったらいい仕事はできません。中世の大工もそれを知っていたから、木の良さを最高に生かし、百年も千年も、もつような建物を造ることができた。なんとしてもいいものを残す。それが職人の意地であり、宮大工の意地でもありますね。

◎伝統的な日本の社寺建築の美しさの根源は、端に近づくにしがって緩やかに反っていく、華麗な、「軒反り」にあります。大工の世界では、「雀と大工は 軒で泣く」という言葉があります。

◎日本の中世の軒は非常に繊細なカーブを描いています。>>宮大工の松浦さんの言葉を聞いて、社寺建築の良さをあらためて教えられた。今まで聞いたことが無い言葉、あのカーブがそんなにいいのか、そんなに難しいのか、驚いた。一番好きなのは尾道の浄土寺本堂だそうだ。東大寺は武骨で男性的。

◎近世にはいつてからは、日光東照宮に代表されるような、過剰な装飾に走る建築物が目につくようになります。私に言わせてもらえば、建築本来の美しさから逸脱した、厚化粧のおばさんにしか見えません。ごてごてとした細工でごまかしているように感じます。中世の美的感覚が近世には失われてしまった。

◎規矩術(きくじゅつ):規とは、ブンマワシ、円を描くコンパスのこと、弥生時代からある。矩とは、指がねのこと。サシガネは大工の基本、使い方を知らなかったら仕事になりません。掛け算、割り算、ルート計算、円周計算までできる。>>サシガネがそんなに大事なものとは知らなかった。単なる直角定規ぐらいに思っていた。鹿島建設のロゴマークが、このサシガネとカタカナの、「カ」なのだ。今の木工も、規矩術を使うが、中世に比べれば、レベルが相当低いそうだ。

◎大工の世界では、サシガネ・墨壺。チョウナを三種の神器と呼ぶそうだ。ヤリガンナが入ることもある。

◎筋違(すじかい)より土壁がよい。スジカイは戻りがきかない、発行し腐った土壁がいいらしい。

◎貫(ぬき)地震に強いヌキ構造のすばらしさ。釘や接着剤で止めるのではなく、木と木の、木組みが強い。

◎ なんととっても木造建築の最盛期は中世だそうだ。道具ができるにしたがって技術が劣化しているそうだ。

- ◎今は午前8時、信州に向かう車の中、今日と明日は天気がいいはずだと見上げながらも雲が多い。多少明るいかなと、快晴の天気を願っている。赤岳鉱泉 2200M で一晩テント泊、「この季節 この歳 硫黄岳に登れたらいいなあ」と向かっている。6時に茨木 IC に入り諏訪 IC 南まで高速道路の乗りっぱなしだ。
- ◎12時に赤岳山荘 1700M の駐車場に到着。駐車料金は2日で2000円なり。前もって問い合わせると雪はまったくない、衣川さんからチェーンを借り、車に積んでいるが使わずにすんだ。3台の車が止まっている、正面に見えるポコリンとした山のとっぺんは白く雪をかぶっている。カラマツの黄葉時期はもう過ぎたのか、かすかに黄色い葉っぱが残っている。信州に来ると、ずっと伸びたカラマツが黄金色に輝くのがすごいんだ。
- ◎荷を背負って歩き出した。テント泊の時はいつも思うが、テント場までが一番にしんどい。今日は2時間のコースタイム、これをゆっくり、30分づつ休憩を取り、疲れを明日に残さないようにと歩いている。今回は小屋で夕食が出るというので、多少荷は軽いがそれでも背中にずっしり重い。途中までは林道歩き、川のそばの傾斜を上がっていく。シャツ3枚着込んで冷たい風がちょうどいい。樹々の中の苔の森がきれいだ、昨日雨が降ったのか、地面は湿り気味、苔も少しはダレているが深い緑が陽に輝いている。
- ◎晩飯は2500円、小屋で喰える、肉料理らしい。皆さんの書き込みを読んでいると、「ステーキだ 旨い」と喜んでおられる。酒も小量持参した、明日の登山に備え、「飲んだら あかんぞ」と戒めている。
- ◎もうすぐ小屋だ、近づいているはずだ、重い、しんどい、きつい。30分に一本、20分に一本の休憩だ。ポシェットに温度計がついている、5度だ。ちよろちよろの水たまりが凍っている。
- ◎3時：赤い屋根が見え赤岳山荘に到着。受付を済ませ登山届を出し、テント場代 1000円/1人、夕食代 2500円/1人なり。広いテント場には3張りのテントだけ。どこがいい、ここがいい、いやあそこが、やっとテントを張り、荷を整理し、時間があるので行者小屋まで散歩に行きましようとお出发了。夕方の光が赤岳連邦のギザギザを紅く照らしている、「やっほう すごい色が 見られた」
- ◎小屋の食事は6時から、「まだ1時間ぐらいありますねえ ちょっとだけ飲みましようか」ミニボトルに入れてきた焼酎をちびりちびりの食前酒、「飯があるから アテを食べるのは やめておきましょう」なんてはしゃぎながらも話が弾む。
- ◎食事は小屋の中、客は10人足らず、皆さんマスクをしてそれぞれ離れたテーブルへ。「ごはん スープのおかわりは スタッフに言ってください」コロナ禍の今、新しい食器を次々使うようだ。手のひらサイズの肉が乗っている、旨いスープにサラダ、香のものとごはん、おいしくいただいた。
- ◎8時にシラフに潜り込んだ。外はおそらく氷点下の温度だろう、もう1枚着るものもあったが、そのまま寝た。
- ◎そうそう昨日、出発の日、4時半に目覚ましをセットして寝たが、鳴らなかった。何時かなと時計を見て驚いた、5時過ぎだった。前回白山に行く時も時間を見ると約束の時間の20分前だった。あの時は服を着ただけで車に飛び乗ったが、昨日はまだ、ごはんを一杯と茶を作って水筒に詰める余裕はあった。カシオのあの時計、もう10年以上経っているかな、買い替え時だね。
- ◎今朝も朝5時に目覚めた。昨日はうつらうつら、「眠れないなあ 眠らんと しんどいぞ」なんてうつらうつらしていたように思っていたが、本当はしっかり眠ったようで、一日元氣だった。目覚めて、「さあ 起きてテントから 出なくては」テントはこれが邪魔くさい。狭いテントの中で片膝立て、ジッパーを探して扉を開き、ふらふらしながらスリッパを探し、四つん這いで外に出た。外はまだ暗いが星が見えない、昨日寝る時点ではたくさんの星が見えたが、雲か霧か霞か、何かが空を覆っているようである。ぼちぼち明るくなりかけてきたが、まわりはまっ白状態だ。
- ◎朝飯は、湯を沸かし、アルファ米を入れ、出汁を入れ、乾燥野菜を入れ、塩昆布を振りかけて喰った。「えええ そんなものが喰えるのかい」と訝られそうだけれど、ま、それなりに旨い、温まる。
- ◎7時にテントを出発。霧はまだまだどっしり居座っている。今日は天気がいいと思っていた、早く霧が晴れてくれ、青空をのぞかせてくれ。小さい小川を一つ二つ超えて行く。

- ◎小川は赤い、赤い水が流れているので、赤岳鉱泉という名前なんだろうね。八ヶ岳連峰は火山の山、今から行く硫黄岳は、爆裂口が半分無くなっているが、立派な火山の爆裂跡がある。ネット知識によると、断崖の直径が1キロ、切り立った深さは500Mだそうだ。シラビソ小屋から見たそびえ立つ岩壁だ。
- ◎八ヶ岳連峰の火山活動は、125万年まえぐらいから始まり、最も新しいもので3万年前の天狗岳やら横岳の噴火らしい。ということは、八ヶ岳山麓にいた縄文人は火山噴火にあっていないんだよねえ。
- ◎霜柱の背が高い、乾いた土を5センチ10センチ持ち上げている、それをわざと踏んで、シャキリシャキリ楽しいね。ところがちょっと上の方にやってくると、温度が下がり、霜柱も簡単には潰れない。リンリンと鈴を鳴らしている、「まだ 熊君いるかねえ 起きているかねえ もう寝てるかねえ」何年か前の11月下旬、木曾駒の頂上直下、「なんで あんな ところに 黒い犬」雪渓を走り降りていった、「あれは 熊だ」澤山さんと二人でケーブルを使わずに登って、小屋泊まり。小屋の最終日で酒をたくさんふるまわれた。翌日は反対側、福島Aコースを下り、中央線の列車で帰った。
- ◎樹々に霧氷が表れた、枝やら葉っぱに白いものが見えだした。まだこの辺りは森林限界の少し手前、木の背丈は低くなりだしている。これはダテカンバかな、風でぐにぐにゆ曲がり立っている。緑のはっぱは針葉樹、これも背は伸び切らず、ずん胴のからだつきだ。
- ◎10時てっぺんにやってきた、寒い、冷たい、零度だ、風が吹く。懐かしいねえここは、何度も来ている、思い出すことがたくさんある。手かじんじん痛い、オーバー手袋をつけても冷たい、霧が晴れない、何も見えない。
- ◎ちょっと待ってみよう、なんだか明るくなってきた、てっぺんをうろうろして小一時間はいたかな、一瞬霧が晴れ、「あれれ 青空が」「おお 下の街が見える」そう言う一瞬が何度もあり、その都度歓声を上げ、向こうの山をこっちの山を見まわした。シラビソ小屋はどこにあるのか見えなかった。
- ◎そうとう上空の風がビュンビュン雲を吹き飛ばし、青空が見え、次に雲が押し返し、そんな一瞬一瞬が何度かあった。この見え方はそれなりにすごい、ずっと青空の下で静かに景色を楽しむよりも劇的、「あ 見えた また 見えた」と風景の断片を接ぎ合わせてまた合わせ、オレの頭の画像がそれなりに大いに満足している。
- ◎昔、てっぺんからの下り、岩の間を歩くときに、ちょっと怖いなと思ったことがあった。今回そこを往復したが、歳をとって、慎重にゆっくり進めば、なんてことは無いと安心した。ただ当時は、縦走中の重いザック、岩にザックが当たれば身体が揺さぶられ怖かったのかもしれない。
- ◎ちょっと下の鞍部（赤岩の頭）に帰ってきた、てっぺんもフラリおだやかな広場だが、この鞍部もフラリといい所だ。上にお堂があったと思ったが・・・青空が出てきた、赤岳への峰々が雪か霜で白く輝きだした。
- ◎鞍部でパンを喰い、ダウンを脱ぎ、おだやかにまわりを眺めた。いやあ 感激の時間だ、悪天候の霧の中でパッパッと見せてくれた景色の断面の感激。この辺りの低いハイ松にも霧氷がこびりついている。
- ◎軽く一本取って、テント場まで戻ってきた。「さあ ラーメンを喰おう」湯を沸かし、インスタントラーメンと乾燥野菜を入れ、いただきます。上でパンもたくさん喰った。目の前で、氷雪訓練用のやぐらを組み立てている。20人ぐらいがパイプ足場に網を張る工事をしている。高所が弱いオレは、下から二段目で勘弁だ。
- ◎2時、テントをかたづけ、ザックに詰め、ラーメンとコーヒーをいただき、車のところに向かって歩き出した。空が曇りだし、温度が下がってきて、4度だ。大阪ならこれは真冬の温度だ。車までは、半分が登山道、川を渡る橋が何度もある。橋といっているが、手造りの木造橋、パイプ橋、増水の都度流されるので、太い針金ワイヤーロープで、大きな岩に大きなナットで、括り付けられている。
- ◎林道の手前まで下りてきた。昨日は凍っていなかったところが氷になっている、昨夜は冷えたんだねえ。
- ◎林道がある辺りはカラマツの森、その下の石ころやら岩やら倒木の幹に、苔がびっしり張り付いている。苔の森だ、夕日に当たって緑色が金色にも見える。
- ◎まだ夕方の明るい時間に車のところまで帰ってきた。服を着替え、美濃戸口までのがたがた道をゆっくり走らせた。風呂も入らず高速道路に乗った。昨日と同じ駒が岳SAで飯を喰った。11時に帰り着いた。

細見周著<熊取六人組 反原発を貫く研究者たち>

- ◎本を読み進むうちに、「あれれ ちょっと ちがうぞ・・・」というケタイな感覚に陥った。「核の専門家が原発をなぜ反対するのか どこがよくないのか 今どうすればいいのか 先々どうすればいいのか」というようなことを知りたかった、専門家の意見を聞きたかった、ところが、六人組の過去の学生運動の話が先行する。
- ◎かつて、1960年代は安保世代、1970年代は全共闘時代というのがあった。二十歳のころにこの運動に関わっていた人は、今それぞれ、安保世代が80歳ぐらい、全共闘時代が70歳ぐらいになっている。6人の専門家が学生時代に、これら運動に賛同してきた延長で、権威である、「原子カムラ」と対峙している、というふうに読み取れる。反対だ、革命だ、体制の打破だ、これと、原発はよくない、が同じように語られている。
- ◎オレの二十歳頃は運動がまさかりだった。大学に合格した仲間も、学校での授業がほとんどなく、レポートのみで卒業している奴もいた。「お前は なんだ・・・」「関心が ないとは・・・」オレは関心が無かった、「何を騒ぐか」とそっぽを向いていた。ゴテゴテ書かれた、立て看板の数々の醜さ、ごみのように机や椅子を積み上げたバリケード、ヘルメットをかぶったスピーカーヤロウの叫び声、その声は何を言っている不明だった。「われわれは われわれは」という言葉だけが聞き取れた。
- ◎オレが二十歳ぐらいの日々、新宿駅東口の駅前ロータリーあたりを通ると、当時のヒッピー族が透明袋にシンナーを入れ、口や鼻から吸引していた。「なにが旨いんだ シンナーなんて」これまた無関心だった。今はよく山登りをするが、当時は登山もまた無関心、新宿駅のプラットホームや駅のコンコースに、イエローオーカーのでっかいザックが百個ぐらい並んでいるのを横目で見ていた。
- ◎新宿騒乱罪の日、9時か10時にデッサンが終わって歩いていると、なんだか騒がしい。亡くなった吉谷が興奮して語っていた。これもまた吉谷が何を語っていたのかいまだに不明。吉谷の友人のS君は騒乱罪の最中に警察に捕まり、黙秘をしたので一か月足らず入っていたとか。彼もまた運動するヒトではなく、ただ黙っていただけだとか。若い頃のオレも拗ねて意固地だったが、今ならすらすらしゃべっているね。
- ◎京大原子炉研究所は大阪の南の方にある。出力5000キロワットの研究用原子炉があり、物理、化学、地学、工学、医学など様々な分野で、核エネルギーと放射線の利用に関する研究がおこなわれている。
- ◎福島原発事故：原子炉が止まって核反応がしなくなっても、核分裂生成物から崩壊熱が発生し続ける。安全対策の三原則、「止める」「冷やす」「閉じ込める」この中の、「冷やす」電源が無く水冷用ポンプが作動しなかった。原子炉は常に冷やしていないと壊れてしまう。
- ◎人体に影響のないレベルの放射線というけれど、少ない放射線でも晩発性障害のリスクはある。とくに子供は、若ければ若いほど細胞分裂が活発なので、遺伝子に傷をつけてしまう、危険が増える。
- ◎事故当時、国や御用学者は、「低線量だから安全です」と繰り返していたが、低線量でもリスクはある。
- ◎原子力発電を利用するということは、放射性廃棄物を大量に発生させる。放射性廃棄物は世代を超えて長い期間処理できない。また研究開発によって解決できる見通しもない。トイレなきマンションである。
- ◎そもそも原子力は核兵器開発から生まれた技術だ。ウランを燃やしてできるプルトニウムは原子爆弾の材料だ。ウランを燃やし、そこに生じた使用済み核燃料を再処理することは、核兵器開発の技術サポートだ。
- ◎京大原子炉実験所は、原子力を進めるための、原子力発電を推進するための研究所と思われるがそうではない。もともと中性子を使って、物理、化学、地学、工学、医学など様々な基礎的研究する実験所です。
- ◎伊方原発訴訟1973より10年：原発の安全性を論じられた裁判。住民が伊方原発設置許可を国に対して取り消すように起こした裁判。住民側には熊取の原子炉実験所のメンバーが付き、国側には東大の学者、政府系団体、官僚、など、「原子カムラ」の面々だった。国が勝訴し、「原発安全神話」が語り継がれていく。
- ◎「原子カムラ：原発を巡る利権によって結ばれた、産・官・学の特定の関係者によって構成された特殊な社会的集団およびその関係性を揶揄または批判を込めて呼ぶ言葉。原発を推進することで、利益を得てきた。

樋口広芳著<鳥ってすごい!>

- ◎著者の先生は、東京大学の鳥の権威らしい。その先生が素人向けに軽く鳥の面白話を載せておられる。この何年か、友人のかんちゃんが探鳥の話をするので、知らず知らずに鳥のことが気になり、空を見上げては鳥を見つめる習慣がついた。友人のいところにも、ユリカモメの須川恒先生がいる。
- ◎この本を読み進んで最後に、「托卵」の項があり、これは面白いと思った。その話の前に、オレがよく食べるチキンのムネ肉とササミの話。若い頃は、豚ヒレ肉同様、「パサパサして 旨くない」と嫌っていたが、年齢を重ねるにつれ、「脂が少なく 旨い」と思うようになった。ムネ肉とササミは形状が違うが、味がよく似ていると思っていたら、ともに翼を上下する筋肉だそう。ムネ肉は翼を上、ササミ肉は翼を下に動かす筋肉らしい。
- ◎体重を軽くするために、骨の内部は中空になっている。
- ◎いくらでも飛び続けるために、たくさんの気嚢という空気の袋があり、酸素を供給し続ける。
- ◎フルスピードで飛んできて、サッと止まれる鳥がいるが、何故こううまく止まれるのか謎らしい。
- ◎鳥たちが見る色の世界：鳥たちは色鮮やかな色彩で飾っている。鳥は昼間の動物であり、色覚がよく発達しているのだ。陽光が降り注ぐ、森、草原、干潟、湖沼、海洋などで色がつくりだす情報を伝達の重要な手段として利用している。脊椎動物の色覚は眼球の奥の内壁にある網膜で光を受感する。波長の違う4種の視細胞のうち哺乳類は初期の段階で夜行性だったので、2種しか持っていない。ただしヒトと霊長類は1種を復活させ3種持っている。ヒトは三色型色覚、鳥は四色型色覚を持っている。鳥は紫外線域、波長300~400ナノメートルも見える。鳥は、私たちが想像もできない色を見ているはずだ。豊かな色世界で生きている。この話は以前から気になっている、「想像もできない色」こう聞くと余計に見てみたい、感じてみたい、絶対に。
- ◎托卵：ずるがしこさの極み。卵を温め、孵った雛を育て、巣立ちをさせる、この邪魔くさい作業を他の鳥にさせるずるがしこさだ。子育てをする、昆虫、魚、爬虫類にも見られる。托卵習性を持つ鳥、その方法でしか繁殖しない托卵鳥は複数グループ見られるが、日本で研究の進んでいるカッコウ類の話が続く。
- ◎托卵する側と、宿主との間には、それぞれに攻防の技術を磨いているが、両者は絶滅せずに存続している。
- ◎カッコウ類は、宿主の巣にいくつか卵があるタイミングを見計らって卵を産む。宿主は最後の四五個を産み落とした後に抱卵を始める。巣に宿主の卵が無い時に托卵すると、巣を放棄されてしまう。宿主が抱卵し始めてから托卵すると、自分のひなが遅れて孵化したら生存の可能性が低い。托卵する巣の事前チェックが必要。
- ◎カッコウ類の産卵時間はとても短く数秒から十秒前後。さっさと終わらせ宿主を怒らせない。
- ◎カッコウ類は、自分たちと食性と同じ鳥の巣に托卵する。カッコウ類は昆虫食、毛虫を主食としている。雛の成長のために宿主が昆虫食の鳥を選んでいる。また、自分より小さい鳥の巣に托卵する。一つには、小さい鳥のほうが数が多い。二つには、小さい鳥に合わせ小さい卵を産み、よその巣にも托卵に回れる。三つには、カッコウ類は孵化したあと、宿主の卵や雛を巣外に放り出す、それには小さいほうがやりやすい。
- ◎托卵鳥は、宿主の卵とそっくりな卵を産む。モズや、オオヨシキリや、ホオジロに托卵する。ホトトギスはウグイスに托卵。ジュウイチはコルリに托卵、青い色の卵。ツツドリはムシクイに托卵、白色卵。
- ◎カッコウ類の雛は、宿主の雛より二三日早く孵化する。カッコウ類の雛は、宿主の孵化した雛も卵も、背中に乗せて巣から放り出してしまふ。巣を独占し、宿主の親鳥の食物を独占する。
- ◎カッコウ類の雛は、宿主の巣の中で大きく成長する、宿主の鳥よりずっと大きくなっていく。大きさも、姿かたちも、羽の色も違う。自分の子じゃないとわかりそうなものだけれど・・・。
- ◎宿主の鳥がカッコウ類の雛を育てるのは、自分の巣で生まれ育った雛は自分の子どもとみなしてしまう鳥の習性からだ。カッコウ類の雛は口をかぱっと大きく開け、宿主の鳥に餌をねだる。口の中の赤やオレンジの鮮やかな色を見せられ、持ってきた餌を思わず入れてしまう。この鮮やかな色は動物行動学的に、「趙刺激」だそう。餌ねだりの声でも、宿主をだます。

◎今は3時だ、いつもの河原、いつものベンチ、キラキラ光る陽を見ているが、これはもう夕方の西陽じゃないのかね。この季節5時を過ぎれば真っ暗になる、3時とはいえもう夕方、陽が西に傾き河原にしょぼしょぼ生えているススキの穂が白く光って揺れる、緑の草を背景にキラキラ揺れる。おだやかな水面には水鳥たちがバサバサ、おなじみのカモ、オオバン、カワウ、サギにカラスにハトもいるよ。そういえばこの何日かのカモ君たちの飛びかたがすごい。シベリヤからやってきた精鋭軍団なのか、十羽ぐらいの群れがシューッと左から右へ、右から左へ、スピードが違う、迫力が違う。夏にのんびり水面を泳いでいた連中とはなんだか違う、なんていうと、「日本が好きだ 日本に居つくよ」というカモの方々に失礼だ。

◎先日、山仲間が、「夏至や冬至といっても 実際には少し 日がずれると 天気予報士が いったよ」「ええ？」今それを調べてみた。何と驚き、冬至より一か月から十日前頃の日没が、冬至のころより5分早い。なので今が日暮れが早い真っ盛りなんだ、もう一か月ほど先だと思っていたのに。ところが日の出さんは反対に正月明けごろから朝寝坊をされる。いままで、夏至や冬至は、日の出・日の入りが一番と思っていたがどうも違うようだ。山登りが好きなオレとしては、今の時期は。夕方の4時には麓に降りていなくてはいけないということだ。ネットでは画像付きで説明してくれているが、なにがなにやら、ま、下手な絵は見ないことにしよう。

ショックな訃報が二つ続いた。

堀田昌宏（45歳ぐらい）が亡くなったという知らせに驚いた。半年前の3月、スペイン・バルセロナで、突然の心臓疾患らしい。家が近所、我が娘たちと歳が近い、そんなこんなで子供時代には、我が家によく遊びに来ていた。高校時代に、「美大を受験したい」ということで我がアトリエに出入りしていた。京都教育大・京都美大と続けて卒業したが、学生時代の飲食のアルバイトが高じ、料理を作ることを仕事を選び、ヨーロッパにも武者修行に出向いたのかな。そこで、スペイン人の結婚相手を見つけ、飲食の店を持ち、子供が生まれ、順風満帆に見えていた。

木村英二（65歳ぐらい）十三病院の内科医。阪大病院で、エクモという人工呼吸器につながれ意識不明のまま亡くなった、コロナ禍の犠牲者なり。一か月ほど前に衣川さんから、「阪大のICUに入ってる 残念」と連絡が入った。展覧会には、何度か観に来てくれた。最後に会った時には、パソコンを広げ、「見て この数字 市販の清涼飲料水には こんなにすごい量の砂糖が入っている この大量はよくない 身体いいいわけない」と真剣に怒っていた。何年か前には、娘の写真を見せつけ、うれしくてたまらないという表情を見せていた。今回のコロナ禍、知人の中ではじめての感染者で、しかも死亡するとは・・・。

◎コロナ禍、コロナの一年が過ぎようとしている。暖かい時期には患者数も減り、「こらあ 収束するんじゃないのかな 日本人は 感染がすくないのでは ないんじゃないのかな」なんて楽観していたが、あれよあれよという間に感染者数が増え、報道では重傷者用ベッドが徐々に埋まりつつあるようなことを言っている。初めのころは感染者数が増えたといっても重症者や死亡者が少なかったが、どうも様子が違ってきた。「いつになったら収束するんだ いつまで続くんだ」これは世界中の人たちのぼやき文句でもあるのかな。

◎というわけで、展覧会もなし、人と会って飲んで騒いでもなし、電車に乗って出回ることもなし、なんだか薄っぺらい、盛り上がらない一年が過ぎていく感じの今日この頃である。おかげで静かに絵が描ける、おかげで山にも登れる、とはいうものの、人は弱いもの、オレは情けないもの。たまには人と会いたい、たまには珍しいものも見たい、たまにはまずいものも食いたい、というヒトらしさがちらちら顔を出す。オレのように気まま勝手に生きている天邪鬼でもそんなわがままを言うのだから、世間の高潔な方々、善男善女は、歯ざりしながらもネットで時間をつぶし、ネットでみなさんと会話をしているのかな。